

令和 2 年度 【 学園研究費助成金 < B > 】 研究成果報告書

学部名 国際コミュニケーション学部

フリガナ 伊藤 信博
氏名 伊藤 信博

研究期間 令和 2 年度

研究課題名 名古屋造形大学所蔵石井染織所染織型紙研究とデータベース作成

研究組織

	氏名	学部	職位
研究代表者	伊藤信博	国際コミュニケーション学部	教授
研究分担者			
研究分担者			

1. 本研究開始の背景や目的等 (200 字～300 字程度で記述)

明治 24 年に名古屋で創業された石井染工所が名古屋造形大学に寄贈した染織型紙 23,000 点の分類・分析から、昨年度に調査した西欧美術館等所蔵の型紙との比較研究を行う。そして、このような比較研究から、西欧の型紙収集が盛んに行われた日露戦争前後の西欧所蔵型紙と名古屋に残る型紙の共通項を探り、人類共通の歴史的文化的遺産の保存や研究の発展に尽くす。この型紙の一部は豊田民芸館で 4 月に展示中であるが、失われた手彫りの型紙の重要性、文化性を明らかとし、「道具」や「商品」としての型紙から、西欧で意識されるように美術としての型紙としての価値を高め、文化として形成される価値観を新に誕生させる研究を行うことを目標とする。さらに将来的には現代の洋服デザインや壁紙デザインの見本としての価値も示す。

2. 研究の推進方策 (300 字程度で記述)

- ・石井染工所の歴史と名古屋の染織・織物の歴史と文化的意義とその価値
- ・伊勢型紙技術保存会との連携による石井コレクション型紙の分類と保存研究
- ・石井コレクション型紙（明治時代のも有り）の写真撮影とデータベース化
- ・展示会計画（本年度 10 月に歴史文化館で展示会「(仮) 紙の形、本の形」の企画
- ・西欧の美術館に所蔵される型紙との比較研究
- ・第一人者である文化庁文化財第一課工芸技術部門（型紙）生田ゆき氏の講演企画（10 月）
- ・絵写本や版本表装に型紙のデザインが使用されており、その比較研究も実施（美術館から表装写真を収集、写真参照）

以上から、名古屋に残る歴史的文化的遺産に大きな焦点を当て、型紙を文化として形成する価値観高い美術品として新に認識させる研究を実行する。

3. 研究成果の概要 (600字～800字程度で記述)

コロナの影響により、・伊勢型紙技術保存会との連携による石井コレクション型紙の分類と保存研究・石井コレクション型紙の写真撮影とデータベース化、・展示会計画（本年度10月に歴史文化館で展示会「(仮)紙の形、本の形」の企画、・文化庁文化財第一課工芸技術部門（型紙）生田ゆき氏の講演企画（10月）の全てが延期された（来年度開催決定）。

そこで、コロナが落ち着いた9月に、名古屋造形大学の一時的入校が認められ、213点の型紙を椋山女学園まで臨時で借りだし、調査を行った。型紙には「突彫り」・「錐彫り」・「道具彫り」・「縞彫り」という四種類の彫り方に加え、補強技術である「糸入れ」と「紗張り」という二種類の技術が存在する。今回の調査では、213点の型紙のうち、突き彫りが144点、錐彫りが53点、突き彫りと錐彫りの二つの技術が使われているのが16点、突き彫りと道具彫りの二つの技術が使われているのが2点であった。また、文様や柄のモチーフの多くは植物であった。植物のモチーフが確認されたのは、110点である。植物の中でも、菊のモチーフのものが26点と一番多く、次いで紅葉が13点と多く見られた。

また、和柄だけではなくモチーフが洋調風のものも確認できた。アール・デコを彷彿とさせる文様である。さらに、「天保四(?)年 正月」と書かれている型紙が発見できた。ただ、反故紙から型紙の製作年の特定は不可能であるが、文化的価値は高いと判断できる。しかしながら、名古屋造形大学の調査型紙の数の少なさから、西欧の美術館に所蔵される型紙との比較研究は、型紙の技法研究を伊藤が収集した西欧の型紙での比較研究やドイツの収集家であるブリックマンの型紙リストで少しずつ進めている。なお、名古屋造形大学型紙の反故紙に明治時代の科学の教科書(理科?)が使用されていた。型紙には普通和紙が使用されており、明治三十六年に文部省が、教科書の用紙を手漉きの和紙から洋紙へ切り替えているため、明治三十六年以前に作られた教科書を地紙に再利用している可能性がある。この発見も貴重である。

4. キーワード (本研究のキーワードを1項目以上8項目以内で記載)

①型紙技術	②アール・デコ	③応用美術	④西欧への影響
⑤文様	⑥表紙への応用	⑦和紙	⑧

5. 研究成果及び今後の展望 (公開した研究成果、今後の研究成果公開予定・方法等について記載すること。既に公開したものについては次の通り記載すること。著書は、著者名、書名、頁数、発行年月日、出版社名を記載。論文は、著書名、題名、掲載誌名、発行年、巻・号・頁を記載。学会発表は発表者名、発表標題、学会名、発表年月日を記載。著者名、発表者名が多い場合には主な者を記載し、他〇名等で省略可。発表数が多い場合には代表的なもののみ数件を記載。)

この研究は伊藤ゼミの学生である藤村香穂と共に実行し、藤村にはこれまで伊藤が収集した写真の全てを提供し、彼女は今年度「染色型紙の分類と発展-実用と美術の狭間で-」と題した卒業論文を執筆し、生活科学研究科の大学院にも合格した。また、名古屋造形大学型紙研究は伊藤と藤村のみに限定されており(同大学が我々の独占を許可)、今後も修士論文、博士論文と藤村香穂を中心に研究が進められていくであろう。さらに来年度は和紙の研究を希望するゼミ生がおり、型紙と和紙研究で新たな発展もあろう。また、この助成により、伊藤は慶應義塾大学教授で表紙版本の研究者である佐々木孝浩と「染色型紙文様研究からみた西欧のジャポニズムの発展と日本の文化継承」(挑戦的研究(開拓))を科学研究費として申請した(2021年7月に採択結果が判明)ことで、これまでの研究分野を大いに拡大することができた。なお、来年度には研究成果(213点の調査では少ないが)を報告する予定である。